

タロチャン

喜多川雅人

今春八十四歳になった一朗の日課の一つに小一時間の散歩がある。

六月終わりの今日は、午前十時過ぎ、杖替わりの傘を右手でリズムをとるよう
に軽く突きながら玄関を出た。どんよりした梅雨空から、霧のような雨が時折降
りかかる。傘を開かなくてもすむレベルだ。この程度の糠雨（ヌカアメ）なら欧
米では傘は開かないだろう、と雨傘をすっかり広げて黙々と歩いている人たち
を脇見しながら、彼我の違いを思い出す。

「転ばないように気を付けてね……。ゆっくり大股で歩いてね……」と、四歳年の下
の康子から、毎度お決まりの一言が背中に届く。返事はない。

下北沢にある自宅を起点に三つの散歩コースがある。今朝は、そのうちの一つ
で、緩い坂の上にある住宅街を抜けてシモキタの古い商店街である通称「一番街」
に下りるコースを選択した。

緩い下り坂の中頃に、「どんぐり園」という二百坪ほどの広場がある。売りに
出た宅地を区が買い取って、その辺では少ない子供たちの貴重な遊び場に変貌
したところだ。

この時間には近くの保育園のチビ軍団が遊びに来ている。毎日出会うから、濃
いエンジ色の制服を着た若い女性引率者には馴染もできた。

保育園児のチビ達は黄色系の制服だ。愛想のいい坊やが一人いて、こちらが軽
くウインクすると、ニコツと笑ってそれを返してくれるから、孤独な後期高齢者
は嬉しいではないか……。名前を聞くのは憚れるから、一朗は太郎君と命名、愛称
はタロチャンにした。会話はない。

気持ちがよい朝の恒例行事が終わると、足も軽やかに坂を下りきり、「一番街」
に出た。そこを右に折れて五分も歩くと、通りの外れに馴染みの酒屋がある。店
主は、地元の同じ小学校の卒業生で、ひと廻りほど後輩だから、商店街の同窓生
たちの近況などで話が弾む。昔の悪ガキたちが、靴屋、ガラス屋、工務店、寿司
屋、メガネ屋、八百屋、飲み屋などの店主に変身しているのだ。数年前からだろ
うか、誰それが昇天したという噂が飛び交うようになった。

開いたばかりの店では、品揃えなど、店主が忙しそうに動いていた。

買うものはいつも同じだ。千円のポルドーを一本だけだから、お得意様とはい
え上客とは言えまいが、店主は小学校の後輩ということもあって気安い。

「いつも同じやつで悪いね…」と、一朗。

「同じ値段で違う赤を入れたので、よければ試してみませんか。これもボルドーです…」

「そりゃ嬉しいね。たまにはかえてみるかな…」

「ボルドーがお好きなようですが、オーストラリアの赤も手ごろなお値段でもおいしいのが入っています。ちよつと試してみませんか？」と、グラスを差し出した。

暫く前にオセアニアのワイン産地を巡るツアーに参加して、気に入ったのを輸入し始めたそうだ。おそろおそろ試してみると、結構いけるではないか。九百円という値段も気に入った。税込みで千円札一枚だから頬が緩む。

天気のことや町の話題を軽く交わしながら、五百円玉と百円玉で勘定を済ませ、ボトルを黒のザックに押し込むと、それを背にして店を離れた。

数か月後、こんな毎日の朝の楽しみの一つが消えた。タロチャンがいなくなったのだ。

「笑顔がいいあの男の子が見えなくなったけど、どうしたのだろう？」と、引率者の女性にそれとなく聴く。

「あの子なら、商社勤めのお父さんの転勤と一緒にメルボルンに行っちゃいました」

「それは残念、あの坊やの丸い目の笑い顔が年寄りの癒しだったのだけどなあ…」

「可愛い子は沢山いますから大丈夫ですよ。今頃のチビちゃんたちは男の子も女の子もみんな可愛いですから…」と、優しい笑顔で慰めてくれた。

…となると、元商社マンで、海外駐在が合わせて十年を超えた一朗の予感では、五年は日本に戻らないだろう。五年後のタロチャンは十歳を過ぎて声が変わり、愛くるしいボーイソプラノは太い低音に替わっているに違いない。勿論、「どんぐり園広場」で遊ぶことはなからう。

片やその頃九十歳になった一朗は、一廻り以上も縮んで、車椅子を付添さんに押ししてもらって散歩している。

公園は、周りに三軒あった家が相続などで手放した土地を区が購入して、倍の広さになった。頼りなかつた広葉樹の苗木もぐつと背が伸びて、気持ち良い日陰を創ってくれている。

この広場には、二人掛けの木製ベンチが四方にいくつか置かれているだけで、それ以外は看板もなければ、広告版もないのが嬉しい。日本が大人になったのだろうか、その昔の高度成長期には道路や公園にべたべた張られていた四色刷り

のけばけばしい広告類はほとんど姿を消している。

シモキタの住宅街は、マンションを含めて、建物の高さが三階建てまでに規制されている。外壁の色も穏やかなものばかりだ。街がお洒落になった印象で、土地の値段も漸増しているという。

賑やかに遊んでいる幼児たちを暫く眺めてから、付添さんを促して、緩い坂道を下がり始めた。

…と、緩い坂の下からスマホを練りながら自転車で登ってきた二十代と思しき男性がそれに衝突した。その衝撃で付添さんの手が車椅子から離れたからたまらない。

急速に坂を下り始めた車椅子から一朗は路上に投げ出された。

ワーツと大声で叫んで目が覚めた。夢だったのである。

びっくりして飛び起きた連れ合いが叫んだ。

「何よ、びっくりするじゃない。また何か悪いことをして追いかけられたのせしように、毎週一回は気が狂ったように叫ぶのだから…。寝不足になっちゃうわ。いい加減にしてよ、まったく……」

(完)